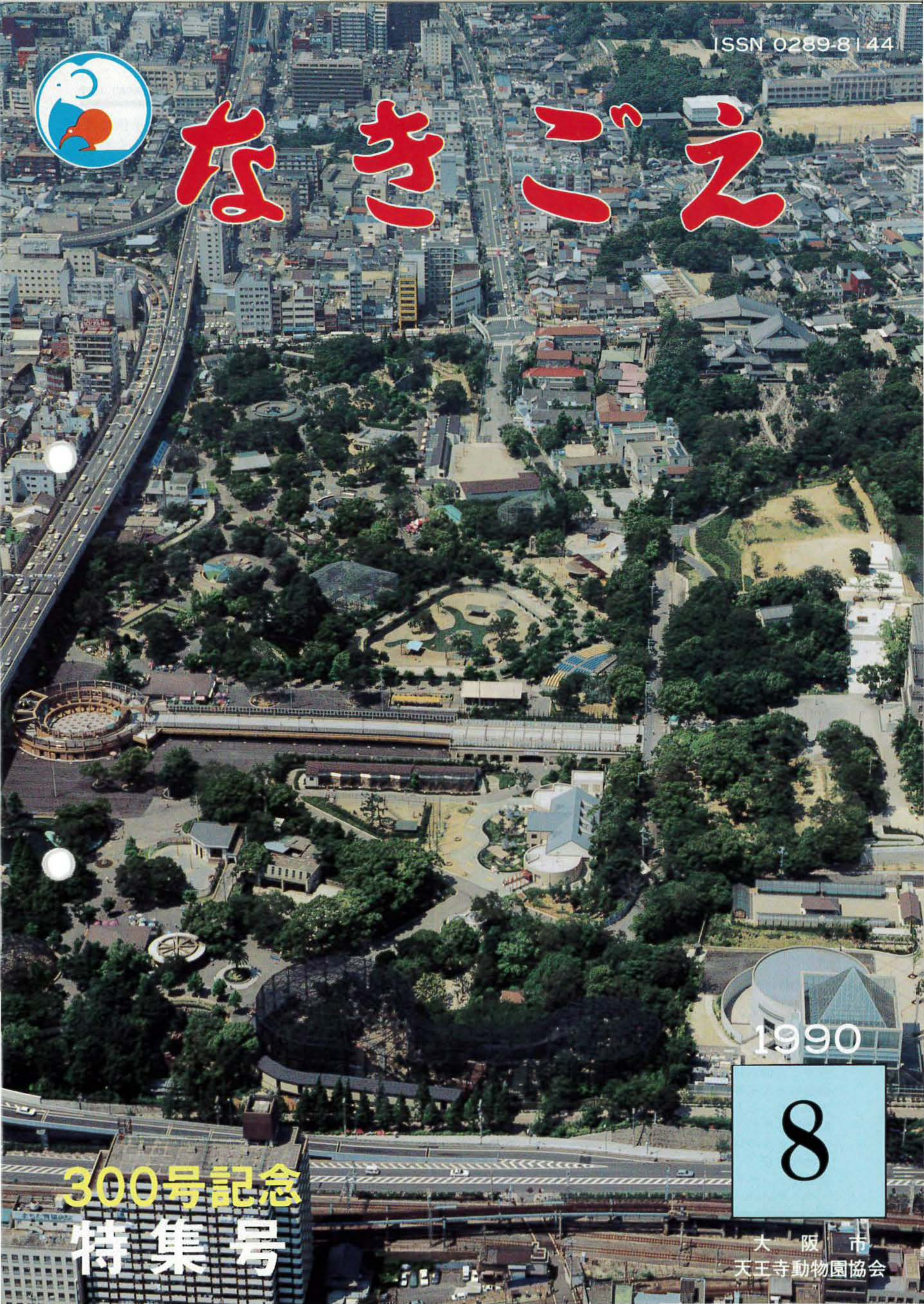
ISSN 0289-8144

なきごえ



1990

8

300号記念
特集号

大阪市
天王寺動物園協会

動物と私

玉 井 義 弘

人の趣味は、動物、植物、鉱物と年令によって変るらしい。私もご多分にもれず、学生の頃までは種々雑多な動物を飼っていたが、今は盆栽と野菜作りに忙しい。しかし、まだ石を磨く心境にはならない。

私が最初に動物を飼い始めたのはひよこであった。小学校1、2年の頃、近所の養鶏場から5匹のひよこをゆずって貰ったことを記憶している。私は兄弟5人の4番目であったが、ひよこの世話はほとんど私がしていたように思う。ただ、当時はまだ幼ない時なので、父が小屋を作り、母が助けてくれていたが、学校から帰ると近所へ草取りに行き、それに米ぬかをまぜて与えていた。両親にとっては、私の動物好きは迷惑であったかも知れないが、やさしく見守り、手助けしてくれていたことが、今なつかしく嬉しく思う。その後、小学校5年の時、約半年間学童疎開に行ったが、その当時に家に鶏がいたかどうかはよく憶えていない。

戦後間もなく、まず犬を飼いたくなって、今では想像もできないが、当時は犬が欲しくても容易に手に入らなかった。戦争中は食糧難で犬を飼う余裕もなく、町の中は犬も猫もほとんど見かけなかったように思う。したがって世の中がやや落ち着きを取り戻したとはいえ、犬を飼いたくても手に入らないのが現状で、どこかの家で子犬が生れると、すぐに貰われていく。仕方がなく、親にしつこくねだってやっと子犬を買って貰ったが、その時の感激は今も忘れられない。

中学生になると、私の動物好きも次第に本格的になり、犬のほか、兎、鶏と増えていった。特に兎は、簡単に子供が産れるので数が増える一方で、仲のいい友達にあげたりしていた。しかし、兎はあまり利巧な動物ではなさそうで、一辺小屋から逃げ出し、縁の下へ入ると捕まえるのに一苦労する。姿は可愛いらしいものの、あまり面白味はなかった。それに比べると鶏の方が余程利巧で愛嬌があった。ある時、近所の5、6才の子供が家に遊びに来た時、手にパンを持って立っていると、庭にいた鶏が、子供の後から抜足差足で静かに近づき、さっとパンをくわえると一目散に逃げていき、子供は泣き出し廻りの者は大笑いしたことがあった。

この頃になると、これらの世話は、弟が少し手伝ってくれた程度で、ほとんど私がしていたように思う。まず、小屋作りから始めるが、少々大きなものでも日が暮れるまで自分一人で懸命に作っていた。幸いなことに、裏庭が比較的広く、また防空壕を作っていた廃材が沢山あったので材料には事欠かなかった。毎日の餌やりから小屋の掃除まで大へんな労力であったが、あまり苦にならなかったように思う。勉強の方は一切無関心で、学校から帰ると犬好きの友達と自分の犬の自慢話に無中になり、とにかく動物に明け暮れしていたようだ。

ある時期、雲雀や雀も飼ったことがある。雲雀は面白い鳥で、春から初夏にかけて麦畠などに巣を作るが、巣に行く時は遠くに下りてかくれるようにして近ずくが、驚かすと巣から直接飛び立つので、すぐに巣が見つかる。そのひなを育てるのであるが実に楽しいものである。少し大きくなると人のあとをピーピーとなきながらついてまわるので、家中が賑やかなことおびただしい。これらの小鳥は、店で売っているインコや文鳥と比べるとやや異った面白さがある。ごくありふれた存在でありながら、実は空を飛び手の届かないものが、次第に自分に慣れ、ごく身近かにいることが子供にとって素晴らしいことのように思うのであろう。いずれは放してやるが、その時は満足感と淋しさが入れ混った感じがする。

このほか、熱帯魚や金魚から蚕や鈴虫にいたるまで、手に入るものはすべて飼育の対象となる。このように、今にして思えば、私の好奇心のため、あわれな犠牲者をなんと沢山つくったことであろうか。

このように、私の動物好きに対して、兄や姉は動物にはほとんど無関心であったように思う。ただ、親父だけは犬などをやさしく可愛いがっているのを憶えている。私の動物好きは、幾分父親ゆずりであったのであろう。

今、私は動物園も担当しているが、今までの罪ほろぼしの意味からも、自然と人間の共生という観点から、今後の動物園のあり方を真剣に考えていきたい。動物をいくら可愛いがっても、それは人間中心の発想で、動物から人間をみれば、これ程迷惑な存在はない。少なくとも、このことだけは忘れないようにしたい。

（大阪市建設局長）

なきごえ8月号もくじ

動物と私 …… 2
"コアラ" …… 3
なきごえ創刊300号に寄せて …… 4·5
新世界と天王寺動物園 …… 6·7
表紙を飾った主役たち …… 8·9
動物園グラフ …… 10·11
ケンちゃんの好きやねん動物園 …… 12·13
動物園日記 …… 14
動物園ニュース …… 15

表紙の写真説明

300号記念号の表紙は空から見た天王寺動物園で飾りました。開園以来75年を経、本年2月24日は隣りの天王寺公園とも一体化し、25haとなりましたが、動物園の面積は開園時の2.6haから11haに拡がりました。

（撮影：大阪市消防局航空隊）

なきごえ26(8),1990

"コアラ"

昨年来園した3頭のコアラに続いて、この4月25日に新たに3頭が来園しました。

来園直後は、落ち着かずに部屋中をウロウロしていましたが、今ではすっかりくつろいでいます。

（撮影：早川　篤）

なきごえ創刊300号に寄せて

天王寺動物園の広報誌として昭和40年(1965年)4月に創刊された「なきごえ」がこの8月で300号を迎えました。ひとくちに300号と云っても毎月毎月25年間もよく続けて発行してきたものだと、創刊時からたずさわってきた自分としては誠に感概深いものがあります。昭和30年代初めに「動物園あんない」という広報誌が6回ばかり発刊されていましたが、その後頓座していたのです。当時、既に東京動物園協会では「どうぶつと動物園」が発刊されており、立派な内容に敬服していたものでした。関西の動物園をリードする、と常々自負してきた天王寺動物園としても、こうした月刊の広報誌を持ちたいと園長をはじめ全職員が念願していたのです。

昭和40年というとちょうど開園50周年にあたる年で、近代的な動物園をめざして獣舎や園路など大改造と、園域の拡張など9ヵ年計画の真最中というところでした。こうしたハード面の充実の他に、ソフト面でも「天王寺動物園50年のあゆみ」の発行や、広く市民に動物園や動物に親しみを持ってもらう意味で月刊「なきごえ」誌を発行することになったのです。この題名については職員の間で募集し、選考の結果、米田飼育係長(当時)が考えた「なきごえ」に決まったのです。動物の鳴声もまた、いろいろな意志をもって発せられ、お互いの情報を伝達しています。動物園や動物の情報をこの“なきごえ”を通して皆さんにお知らせしたいということなのです。

発行母体もその年発足した天王寺動物園協力会という任意団体でしたが、2年後に天王寺動物園協会という法人資格となり、基盤も固っていきました。

さて、創刊号といってもモノクロ写真のわずか数頁のものでしたが、それでも毎月続けるとなると少ないスタッフで本務を持った上でのこと、写真撮影から現像、焼付、原稿書き、編集、校正と、一人何役もこなさねばならず、大変なことでした。編集は松岡主査(当時)で、私が写真関係を一手に引受けたのです。フィルム現像や焼付は、動物園に暗室も引伸機もなかったので自宅で夜間に作業をしたものです。もちろん、自宅に暗室などあるわけではないので、夏は夜明けが早く空が白みかけてくるとあわてて印画紙をしまい込んだり、いろんな苦労が思い出されます。

発行日を毎月15日としていましたが、遅れて月末の発行になってしまったことも再三ありました。67年、69年には、各1回2ヵ月分の合併号を出したりと遅れを取りもどす苦肉の策?で切りぬけました。この合併号は増頁としカラー印刷の園内案内図を入れました。これが“なきごえ”のカラー化のはしり?だったように思います。

1970年は万博の年でしたから、各国から贈呈された動物たちのニュースや写真で埋めつくされました。特にこの年の7月にニュージーランドから贈られたキーウィについての記事は、夜行性の鳥で昼は巣箱に寝ていて見ていただけないこともあり、毎年7月には誌面でそのようすを紹介する特集を組むことになりました。その他、インドからのゾウのラニー博子、チーターやエチオピアのアビシニアライオンの受入れなど忙しくも思い出の多い年でもありました。

大阪万博の際ニュージーランドの首相より、キーウィの贈呈をうける

日本で初めて展示されたホワイトタイガーも取材し、誌面をにぎわしました。この年、なきごえの定価はこれまでの1部40円から50円に値上げしたのですが、その2年後から現在の100円となりました。71年になると編集委員会を発足させ、年2回会合を持ち、半年分の編集内容を決めることにしました。自然保護特集を組んで、山階鳥類研究所の黒田長久先生や、日本雉水鳥協会の仲田幸男先生など広く外部の方に寄稿をお願いするようにもなりました。72年は上海動物園との第1次動物交換の行われた年で、この親善動物のクロオオカミやマナヅル、また、大阪から贈ったアシカやペンギンの記事が誌面をにぎわせました。また、北京動物園との動物交流も行なわれ、日本初渡来のモウコガゼルも話題を提供しました。73年から、増頁して11頁とし、ほぼ今のような体裁となりましたが、増頁にはそれなりの苦労が加わるものです。75年には第1回のサマースクールが開校し、その生徒募集や、開校中の模様をグラビアで扱って、動物園での教育活動をPRしました。

第1次、大阪・上海友好都市提携動物交換

77年には飼育課職員のなかでも海外旅行に出る人も増え、外国の動物園の見学記などが誌面をにぎわすようになりました。また、直接動物を飼育しているキーパーの飼育記事や、短報としてキーパーズアイと称するものが載るようになりました。これは、常々、私も奨励していたことですが、飼育記録を“なきごえ”で活字にしておけば、その記録がいつでも活せるし、後に残るものだと云ってきたことが徐々に実ってきたことに喜びを覚えたものでした。

81年1月に上海雑技団のジャイアントパンダの偉々(ウエイウエイ)の公演が大阪市で催されました。土井課長(当時)と私が約1ヵ月の間、公演場の見本市会場（当時、朝潮橋）でパンダの環境づくりや、餌の調達、など側面の協力をしたわけですが、この時の見聞や体験を記事にしたものでした。

また、この年から大阪動物園ボランティアーズの有力メンバーだった富樫君が、北米に留学したので、彼が9回にわたって、北米の動物園の最近の情報を“北米通信員だより”として寄稿してくれました。

さきに述べましたが、例年夏はキーウィ特集として掲載してきたのですが、飼育10年を経過してキーウィ飼育一筋の礒田さんに“キーウィの合唱”と題して書いてもらいました。これが新聞記事になり大きな話題を呼んだことを覚えています。さらに英字紙にも載り、海を渡ってニュージーランドでも現地の新聞にとりあげられたのです。“なきごえ”の記事が海外にまで伝わる、これは本人はもとより編集に携わったものとしても大変な喜びでありました。

さて、82年4月号が創刊200号となりました。200号ともなると何か一皮脱いで大きくならなくてはというのが、編集委員の総意でありました。費用もかかるのですが、表紙のカラー化を協会にお願いしましたところ、快よくOKが出たのです。表紙と裏表紙がカラーとなったのがこのときからです。やはり、動物の表情はカラーにかぎります。編集委員会でも表紙の写真の担当は取り合いという状況でした。この200号は、特集号として“なきごえ”200号のあゆみをグラフで紹介し、小学生による「未来の夢の動物園」というテーマの座談会、それに「天王寺動物園のルーツをさぐる」ということで、府立大阪博物場の動物檻について近畿大学短期大学部の埜上衛先生に書いていただきました。

本誌の「動物と私」というコーナーは、創刊時からのものですが、83年には、古賀忠道元上野動物園長(故人)や浅倉繁春前上野動物園長にも寄稿していただきました。このコーナーは、外部に依頼するもので、なかなか大変なことで、有名、無名含めて300人の方々に登場願ったことになります。

また、この年“動物の親善使節”というタイトルで、大阪市長、大島靖(当時)に寄稿いただきましたが、この中で、昨年末市民の皆様に喜ばれている人気者のコアラの誘致にふれられています。

なきごえ開園70周年記念号表紙

85年は、開園70周年を迎える年で、記念特集号を組み24頁としました。土井良彦園長（当時）の挨拶、古賀忠道東京動物園協会理事長(故人)の「天王寺動物園と私」和田辰巳元園長の園長回顧録、グラフでは「新聞と写真でつづる70年のあゆみ」を4頁にわたり取り上げました。また、動物の初来記録や、「数字で見る70年のあゆみ」では、収容動物数、面積、入園者数、入園料、長年飼育動物、動物園の所管の変遷などを紹介し、記録としても意義ある号となりました。

86年には、“ケンちゃんの好きやねん動物園”を年3回の割で登場願いました。これは、地元の漫画家でエッセイストの松葉健さんにお願いしているもので、当世のマンガブームに乗ったという訳でもないのですが、やはり、活字と写真ばかりよりバラエティーに富んで好評です。

すでに、「どうぶつと動物園」では根本進さんの「クリちゃんの動物園散歩」が早くから登場しており、これに追随した？というかたちでもありますが…？何にしても創刊以来42年486号という歴史に、専属スタッフ、すばらしい企画、それに財力と四拍子揃った「どうぶつと動物園」に、少しでも我々も近づけようと努力をしてきたわけです。最近は、「あしあと」「つぶやき」「はばたき」など機関誌を出している園が増えています。

87年は天王寺博開催の年で、これを記念してのバードケージ、「鳥の楽園」がオープンしました。これの関連記事が多く見られ、表紙の写真も新しく入園した珍らしい水鳥たちが目を引いています。

また、「鳥島のアホウドリ」と題して東邦大学理学部の長谷川博氏に寄稿いただくなど、フィールドでの動物たちの記事も載せて、動物たちを取りまく環境についての現状や保護を訴えました。

88年は前年の11月に初めて成育に成功したホッキョクグマの赤ちゃんのかわいい写真と記事で埋まる年でありました。

コアラの誘致

その他、コアラの受け入れ前年としてユーカリの栽培状況やコアラ舎の建設についての記事が特徴的でした。

89年はいよいよコアラ受け入れの年ということで春から夏にかけてはコアラ一色の“なきごえ”となりました。また秋には、上海動物園から贈られたレッサーパンダや、レニングラード動物園からのカラフトフクロウや、シロフクロウの写真や記事で賑わいました。そんな中で、「クロサイの繁殖作戦」は、稀少動物を守るための動物園間の連携と地味な努力を広く皆さんに知ってもらうことで有意義なものでありました。

まあ、ざっと創刊時から25年をふり返ってきたのですが、“なきごえ”は動物園の歩みを時々に映してきました。私自身時には挫折しかけたこともあり、そのたびに“読者が待っているんだよ”の一言に気力を奮い立たせて取り組んで来たものです。背伸びせず一歩一歩きざんできた300号、本当にお目出とう。

この300号は記念号となり、動物園グラフもこれ以降、カラー化するということを聞き、また一歩、前進したことになります。私がただ一つ心残りなのは第3種郵便物の認可の件です。これも早くから認可を受けようと努力したのですが、なにせ、購読者数の壁があったのです。今後も皆さんの暖かい御支援で“なきごえ”が大きく成長していくことを祈願してやみません。

(前天王寺動物園飼育課長代理
現淀川保健所環境課長　樽本　勲)

新世界と天王寺動物園

竹島昌威知

天王寺動物園と私の関わりは古く、半世紀にもなる。最盛期といわれた昭和初期、私は動物園の北側に生まれ育っただけに、日夜、動物たちの咆哮を聞いて暮らしていた。そのなきごえは高く低く、長く短く、閉園後もよく聞こえ、なきごえが聞こえにくいときは、動物が病気でもしたのではないかと、少なからず気を揉んだものだった。

昭和初期の動物園

昭和初期といえば、色んな動物が続々と来園してきた。中でも特筆されるのが、7年7月にやってきたチンパンジーのリタで、リタの人気は大阪のみならず、日本中の人気を集めた。というのは、やってきて僅か1ヵ月余りで芸を覚え、9月1日から入園者に演技を披露したのである。

芸達者なチンパンジーのリタ嬢

リタの演技は幅広く、竹馬、自転車、ナイフ、フォークを使っての食事や、食後に紅茶を飲んでタバコを吸う、といった具合で、観客はやんやの大かっさい。こんな芸達者なチンパンジーは全国でも初めてと、新聞などで大きくとり上げられ、日本中の人気者となった。

この大ニュースをいち早く知った私の母親は、動物園に近いことと、幼児は無料ということにかこつけて、月に幾度も連れてくれた。それが母であったり、ときには叔父であったりで、人変われど主変わらずというか、それから後は、事あるごとに訪れる機会を得た。

現在はコアラが人気を集めているが、リタの人気はもっと凄く爆発的だった。食事は特設舞台のテーブルで行ったが、自転車に乗るときは園内を走るので、アナウンスがあり、その後ロープで観客を制して走らせていたのを覚えている。

「それっ、リタじょうがあんな上手にナイフを使こてる。よぅ見せんと、ちゃんと見なはれ！」

母に言われても、何故リタじょうなのか分からなかった。叔父に連れられたとき、リタはメスだから女の子、お嬢さんなのでリタ嬢だと教えられ、私はリタ嬢で通したが、近所の人もそう言っていたようである。叔父は、リタのまえにもチンパンジーがいて太郎というオスで、リタほどの演技はなかったものの、えらい人気であったが、1ヵ月ほどで亡くなった、と聞かされてもうわの空、私はリタ以外に目がなく、リタだけを見に動物園に通った。

母はほかの動物もよく見るようにと、画用紙にスケッチすることを教え、叔父は動物園や周辺の歴史を教えてくれた。お陰で幼少期は動物の絵ばかりを描き、小学校低学年の頃、キリンの首が長いので、画用紙が足りないと、継ぎ足して描いて叱られた。しかし、絵の出来が良かったので貼り出された。

当時の動物園は、北園にクジラの全身骨格があって、長さ20m、重さ2930kgもある大きなもので下から腕木で支え、空間に浮かせた形になっていたようだ。怖いもの見たさに、クジラの骸骨を首を傾げて見ていると、場所が武道の館『武徳殿』に隣接しているため、時どき聞こえる「えいッ！やァ！」の声に、風化しつつある骨を眺めながら、身を縮めたものだった。

そんな頃、リタの訃報を聞いた。世の中が紀元2600年に湧き立つ昭和15年7月23日、名優リタが他界した。リタの訃報に叔父の胸を叩いて私は泣いた。それにしても不思議な猿である。来園したのが7年7月23日、丸8年間、たった一匹のチンパンジーが、戦前の最盛期をもたらしたのだ。

リタが残した功績は大きい。来園後入園者を増やし、いち時期、東京上野動物園の入場者を凌ぐ。

リタが亡くなった動物園の寂しさ、しばらく行くのが嫌になり、その後、私は新世界へ足を向けるようになった。邦画、洋画ともに名作が上映された時代で、見応えある作品が多かった。

リタを想って観たのが『ターザン』ものである。ジョニー・ワイズミュラー扮するターザンのりりしさ、子分のようについて回るチンパンジーのチーター。リタそっくりなので好きになり、ターザン映画は総て観ている。それも不思議にラヂウム温泉階上の劇場であった。ほかの映画はよその劇場へ観に行くのに、ターザンだけはなぜか温劇と決めていた。

当時ラヂウム温泉は、ローマ風の大きな円型浴場があり、階上は娯楽施設や劇場、地階には25mプールがあって、中の様子がジャンジャン横丁から眺めることができた。私は悪童たちとプールで泳ぎ、階上の劇場で映画を観たが、時どき娘義太夫なども やっていた。ラヂウム温泉は戦後なくなり、温劇となって、日本初のストリップ劇場として盛況を極めたが、衰退を見るに到って演芸・寄席を中心にした『新花月』に変身。それも時の流れに逆らえず、遂に劇場を閉じてしまった。

なきごえ26(8),1990

新世界の方も同じで、映画が斜陽産業と呼ばれて以来、閉館するところも増え、昔栄えた有名映画館が消えて久しい。『公楽座』も以前の面影はなく、『日劇』はマンションを経営、『朝日劇場』は映画を止め、大衆演劇とパチンコ屋で経営を続けているが、元来、朝日劇場は実演が売り物で、往年の喜劇人も大勢舞台を踏んでいる。それは現在のパチンコ屋の前身で、映画館は戦前、東側に『第二朝日』としてあった。

今では映画館、寄席小屋よりもパチンコ屋が多くなった新世界界隈

そういえば新世界の今昔はずい分違う。初代通天閣が完成から32年を経た昭和18年、大橋座の失火で類焼した。翌年解体供出したが、それまでの通天閣は大正ロマンの象徴ともいえ、昭和になれば経済恐慌や戦争で、象徴に酔うことが少なかった。それでもロマンの余韻を残す通天閣に、私は何度も昇って下界を眺め、巨視と微視の狭間でしきりに空想に耽っていた。

初代通天閣は現在地より南にあり、現在地には噴水があって、大した水量でもないのに人は涼を求めて集っていた。ドーム型の橋桁の足元には土産物屋が軒を連ね、アメリカの福の神・ビリケンさんが安置されていた。江戸川乱歩が小説『怪人二十面相』の舞台にしたほどで、ハイカラな気風もあった。

初代の通天閣と動物園

戦後、寂しくなった新世界の復興を願い、2代目通天閣を昭和31年に完成させた。当初は珍しさもあり、高層ビルが少ないために、多くの入場者で潤ったが、続々と建てられる高層ビルによって通天閣の魅力が薄れ、自然足が遠のき入場者が激減した。通天閣側としては王将阪田三吉を忘れてはならないと、脚下に王将碑を建立し、昔あったビリケンさんの復活を行ったりして、懸命に知恵を絞っている。

新世界を代表するものの一つである阪田三吉の王将碑

阪田三吉で思い出すことがある。三吉は明治3年堺市に生まれ将棋一途に生き抜いた人。新世界との縁も深く、通天閣を眺める位置に住んでいたこともあって、私たちとの縁も浅くない。この三吉がこともあろうに、年こそ違え6年後の昭和21年、リタと同じ7月23日に亡くなっている。偶然といえばそれまでだが、初代通天閣が明治45年7月、昭和7年7月にリタが来て、8年後の7月に昇天、三吉は7月に鬼籍に入っている。

新世界と動物園は7月に縁がありそうだ。しかもこの10数年来、ホッキョクグマへの氷柱のプレゼントが、7月23日とはどういうことだろう。

新世界と動物園は相乗して栄えてきた。それが、映画の斜陽化のため新世界の人気が低下、これに反して動物園は、北園・南園ともに拡大され、タスマニアデビルやコアラなど珍獣の導入によって、目下繁栄の一途を辿っている。

通天閣の名は、昨年亡くなられた藤沢桓夫氏の祖父、藤沢南岳が命名した。明治の気骨が感じられる。親の苦労を楽をして受け、孫の代では物もらい、であってはならない。

そこで新世界の復興を愚考してみるに、21世紀を先取りする企画と、レトロとの対話を求めることである。今やレトロが珍しい時代である。どこかの劇場がやってくれればと願うのが、昔懐かしい大道芸だけを演じる小屋である。大道芸だけでなく物売りをも添え、さらに売店をビックリぜんざいや、屋台の串カツの模擬店にすれば、客は珍しい大道芸と共に陶酔するに違いない。

模擬店が駄目なら劇場外で、昔の味と安さで勝負する。それと問題は夜店の復活である。通天閣の足元に拡がる日本一の夜店を想像してもらいたい。昼は動物園、夜は新世界の散策と興味が尽きないのだが——。私は、新世界と動物園が、末長く相乗的に栄えて欲しいと、つねづね心から願っている。

（日本ペンクラブ会員
日本詩人クラブ会員）

表紙を飾った主役たち

1．はじめに

「なきごえ」が誕生したのは25年前の1965年である。通算300号という節目を迎えるに当って歴代、本誌の表紙を飾った主役たちをこの際、整理してみようということになった。私にその作業のお鉢がまわってきたのは以前からパソコンを少しいじっているという単純な理由によるものである。

分析の結果が面白いものになるかどうかはデータの整理の仕方や眺める角度によって如何ようにもなるので周りが期待するような結果に落着くかどうかは保証の限りでない。ましてや動物園歴の浅い私が撮影者の意図や被写体として選択した動機などをまったく無視して単純に動物名を数値的に処理するわけであるから、記事の大半が無味乾燥なものになることを予めお断りしておきたい。

2．動物の区分と登場回数

通算300号ということであるが、本誌の70周年記念号と今回の300号の表紙に園の航空写真が使われているので実際に動物が登場したのは298回である。

表1は月別に各動物の登場回数を集計したものである。哺乳類が159回、鳥類126回で全体の96%を占めているのに対し、爬虫類はわずかに4%である。そこで過去22年間の哺乳類、鳥類、爬虫類の飼育数を調べたのが表2である。鳥類の標準偏差が22と少しバラツキが大きいものの、各動物間には統計学的に有意の差があり、その構成比は爬虫類を1とすると、哺乳類が3、鳥類が5である。これと今回の登場回数の構成比を比較すると、爬虫類の登場回数が極端に少ないことが指摘される。

また、哺乳類と鳥類の関係についても比率の上では鳥類の方が優勢であるにもかかわらず、登場回数ではその比率が逆転しており、鳥類よりも哺乳類の方が登場のチャンスに恵まれているといえる。

3．月別の傾向

表1に戻って各動物区分の月別登場回数を検討してみよう。

鳥類の7月の度数が飛抜けているのは、当園の看板動物の一つであるキーウィの記念すべき導入月が7月であったので、過去12回、この月にキーウィを載せていたからである。いわば7月はキーウィの指定席としてその出番が保証されていたわけである。

また、これとは逆に1月に哺乳類や爬虫類の度数が高いのは、この月は毎年、その年のエトに因んだ動物が登場することになっており、エトを構成する動物をみても哺乳類が多くなるのは仕方のないことである。折角の集計なので統計学のご神託を窺うことにする。

過去25年間、月によって動物の種類数の増減に変動がなかった、という前提で適合度の検定を行なうと、哺乳類も鳥類も危険率5%の水準では統計学的に登場回数に有意差はない。この場合、鳥類のデータは相当バラツキがあるので間違いではないかと思われるに違いない。私もそう思って検算し直したぐらいである。因みに危険率を6%にすれば有意差が結論できるわけで水準の取り方如何で結論は逆転する。この際どっちに転んでも大騒ぎするほどのことではないので判断は読者にお任せする。

4．季節別の傾向

表3は表1を季節別に集計し直したものである。これをさらに春夏（3月～8月)、秋冬（9月～2月）に大別して哺乳類と鳥類を眺めると、両者の間は負の相関関係になっていることが読み取れる。

つまり、哺乳類で春夏の度数が65、秋冬が94でその比はほぼ4対6。一方、鳥類のそれはそれぞれ80対46、その比は6対4と逆転している。

このことは春先から夏にかけては鳥類が、秋から冬にかけては哺乳類が被写体として選ばれてきたことを示すものである。

表紙の写真は通常、発行の1～2ヶ月前に撮影する。つまり鳥類は冬から春の一番羽色のあざやかな時期にモデルとして選ばれる傾向が強いことを示している。またエクリプスの時には鳥は敬遠されるのであろう。

5．動物別の登場回数

表4は本稿の表題にしたがって主役となった動物をすべて一覧表に整理したものである。整理方法は一般的に用いられている目の分類様式に従い、各目については登場回数の多いもの順に並べることにした。

6．おわりに

このように一覧表にしてみると、目によっては未だ一度も登場の機会に恵まれていない動物もいるようである。理由は色々考えられるが中でも撮影しにくい条件下にいる動物は敬遠されがちで気の毒である。選に洩れた動物から、「私たちも表紙の主役になれるような動物舎に移して！」という声が聞えてきそうである。　（飼育課長：中山良三郎）

表1　動物の区分と登場回数

月別	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
哺乳類	11	12	10	10	7	14	15	19	14	12	19	15	159
鳥類	15	12	11	13	19	10	9	6	9	11	2	9	126
爬虫類		1	1	2		1	1			2	4	1	13

表2　動物区分別構成比の比較

	哺乳類	鳥類	爬虫類
過去の飼育種類数平均	104 ± 8	187 ± 22	36 ± 9
構成比	3	5	1
表紙登場回数	156	126	13
構成比	12	10	1

表3　季節別の登場回数

季節＼区分	哺乳類	鳥類	爬虫類
春（3～5）	33	38	2
夏（6～8）	32	42	3
	(65) 対 (80)		
秋（9～11）	48	24	1
冬（12～2）	46	22	7
	(94) 対 (46)		

表4　表紙に登場した動物の一覧表

綱	目	動物名	頻度	綱	目	動物名	頻度	綱	目	動物名	頻度	綱	目	動物名	頻度
哺乳類	有袋目	キタオポッサム	1	哺乳類	食肉目	ヨーロッパオオカミ	1	鳥類	ペンギン目	イワトビペンギン	1	鳥類	キジ目	ハイイロコクジャク	1
		ビクトリアコアラ	1			アカギツネ	1			ケープペンギン	1			ハゲガオホウカンチョウ	1
		アカカンガルー	1			ホンドギツネ	1			ジェンツーペンギン	1			ベニジュケイ	1
		ハイイロカンガルー	1			コヨーテ	1			マゼランペンギン	1			フサホロホロチョウ	1
		ワラビー	1			ブチハイエナ	1		ペリカン目	モモイロペリカン	2			ヤブツカツクリ	1
		オグロワラビー	1			レッサーパンダ	1			カツオドリ	2		ツル目	タンチョウ	6
		クロキノボリカンガルー	1			アライグマ	1			カッショクペリカン	1			ホオジロカンムリヅル	2
		フクロギツネ	1			ジャイアントパンダ	1			カワウ	1			アネハヅル	1
		タスマニアデビル	1			エゾヒグマ	1		コウノトリ目	シュバシコウ	3			オオヅル	1
	翼手目	インドオオコウモリ	1			ツシマヤマネコ	1			ヘラサギ	2			ナベヅル	1
	食虫目	ハリネズミ	2			ベンガルヤマネコ	1			インドトキコウ	1			マナヅル	1
	霊長目	ローランドゴリラ	8			アジアゴールデンキャット	1			ショウジョウトキ	1			ブケコ	1
		オランウータン	5			ボブキャット	1		フラミンゴ目	フラミンゴ	5		チドリ目	インドトサカゲリ	1
		チンパンジー	4			ジャガー	1		タカ目	ウオクイワシ	2			ウミネコ	1
		ニホンザル	3			チーター	1			オジロワシ	2			ムナグロ	1
		ケナガクモザル	1			ミーアキャット	1			トキイロコンドル	2		ハト目	カンムリバト	1
		シロテナガザル	1			フェレット	1			カラカラ	1			ソデグロバト	1
		スローロリス	1			オセロット	1			カンムリワシ	1		オウム目	アオハシインコ	1
		セアカリスザル	1			キンガジュー	1			クマタカ	1		フクロウ目	カラフトフクロウ	1
		ドリル	1			コツメカワウソ	1			コンドル	1			フクロウ	1
		マンドリル	1		鰭脚目	アシカ	1			サシバ	1			ワシミミズク	1
		ハナジログェノン	1			カリフォルニアアシカ	1			トビ	1		ブッポウソウ目	ワライカワセミ	2
		パタスザル	1		長鼻目	アジアゾウ	4		カモ目	コブハクチョウ	3			サイチョウ	2
		ヨザル	1		奇蹄目	クロサイ	4			アカツクシガモ	2			オオサイチョウ	1
	貧歯目	オオアリクイ	1			グラントシマウマ	4			エジプトガン	1			ムジサイチョウ	1
	ウサギ目	オランダミニウサギ	1			アメリカバク	3			カナダガン	1		キツツキ目	オニオオハシ	1
		カイウサギ	1			マレーバク	1			ハワイガン	1			サンショクキムネオオハシ	1
	げっ歯目	ムササビ	2		偶蹄目	アミメキリン	5			ロウバシガン	1		ホトトギス目	ホトトギス	1
		アフリカタテガミヤマアラシ	1			カバ	3			マゼランガン	1		スズメ目	ルリサンジャック	2
		カナダヤマアラシ	1			ニホンジカ	3			コクガン	1			イエガラス	1
		パラワンヤマアラシ	1			バーバリーシープ	3			オウギアイサ	1			ウスカクビタイヨウチョウ	1
		アグーチ	1			イノシシ	2			オシドリ	1			カケス	1
		カピバラ	1			イボイノシシ	2			キンクロハジロ	1			キュウカンチョウ	1
		ヌートリア	1			ヒツジ	2			クロエリサケビドリ	1			ルリコノハドリ	1
		パカ	1			ラマ	2			クロエリハクチョウ	1	爬虫類	カメ目	アルダブラゾウガメ	1
		マーラ	1			コビトコブウシ	2			シロガオリュウキュウガモ	1			ムツアシガメ	1
		プレイリードッグ	1			エゾシカ	1			ミカヅキハシビロガモ	1		トカゲ目	ディレピスカメレオン	1
	食肉目	トラ	6			ダマシカ	1		キジ目	シロクジャク	2			ウォータードラゴン	1
		ライオン	6			キョン	1			マクジャク	1			エジプトトゲオアガマ	1
		ホッキョクグマ	4			エランド	1			ニホンキジ	1			グリーンイグアナ	1
		ピューマ	3			ブラックバック	1			ミミキジ	1			ミズオオトカゲ	1
		ヒョウ	2			ベイサオリックス	1			シロミミキジ	1		ヘビ目	ボアコンストリクター	2
		ヒグマ	2			モウコガゼル	1			ニジキジ	1			インドニシキヘビ	1
		ニホンツキノワグマ	2			ラクダ	1			アオエリヤケイ	1			キングコブラ	1
		マレーグマ	2	鳥類	ダチョウ目	ダチョウ	1			アカヤマドリ	1			ミドリニシキヘビ	1
		オオヤマネコ	2		ヒクイドリ目	ヒクイドリ	2			インドクジャク	1		ワニ目	ヨウスコウワニ	1
		ビントロング	2			エミュー	1			シチメンチョウ	1	計			
		チュウゴクオオカミ	1		キーウィ目	キーウィ	12			シャモ	1				298
		チョウセンオオカミ	1		ペンギン目	オオサマペンギン	2			セキショクヤケイ	1				

なきごえ26(8),1990

動物園グラフ

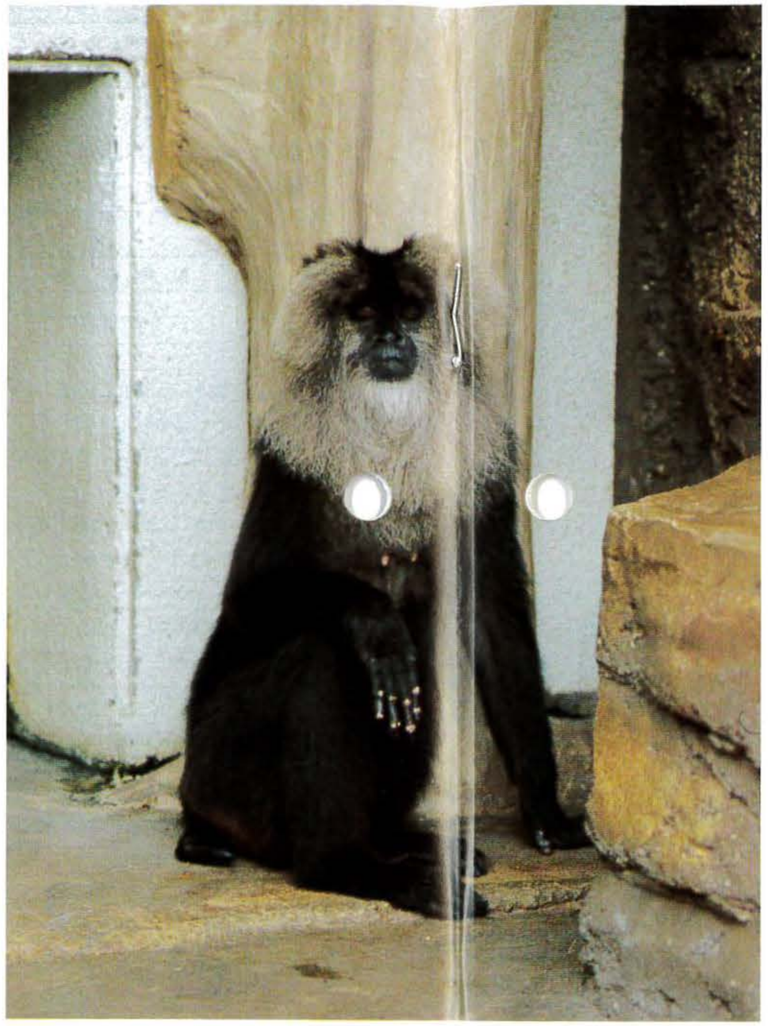
“なきごえ300号記念特集”

昭和40年１月１日、天王寺動物園は開園50周年を迎えました。これを記念し、４月10日に小誌が創刊されました。以来25年、本号をもって300号を数えます。

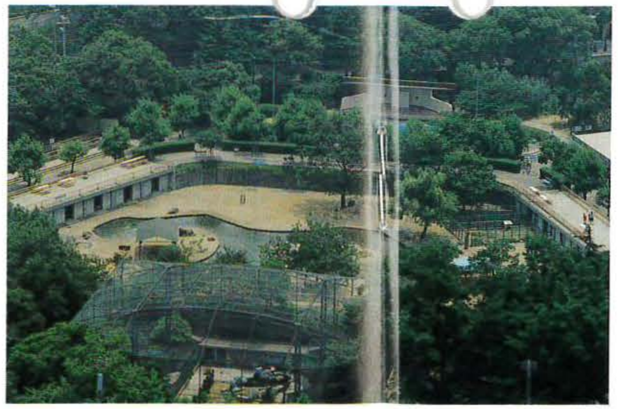
今年は創刊時の出来事を中心にまとめてみました。　　　　（構成・撮影：長瀬　健二郎）

創刊号はフラミンゴ、100号はダマシカ、カラー化された200号はベニジュケイが飾りました。

動物園改造９ヵ年計画の一環として総面積 528㎡の類人猿舎が完成しました。

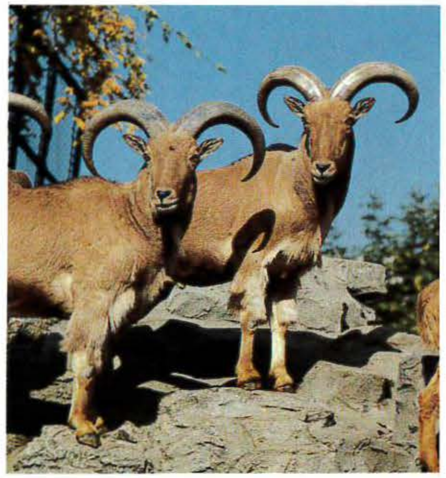


７月１日、一頭のシシオザルが生まれました。今はもうおばあさんですが、息子夫婦や孫に囲まれ、幸せな余生を過してい…



この年3937㎡を誇るカモシカ園も完成しました。ベイサオリックス、モウコガゼルがここで日本初の繁殖に成功しています。

ピューマもこの年の８月１日、天王寺動物園で初めての繁殖に成功しました。



２月24日には２頭のバーバリシープが初めて来園しました。以来、毎年のように繁殖しています。

開園50周年を記念し韓国の昌慶苑動物園よりワシミミズクが贈られました。以後５羽のヒナが成育し、日韓親善に尽くしました。

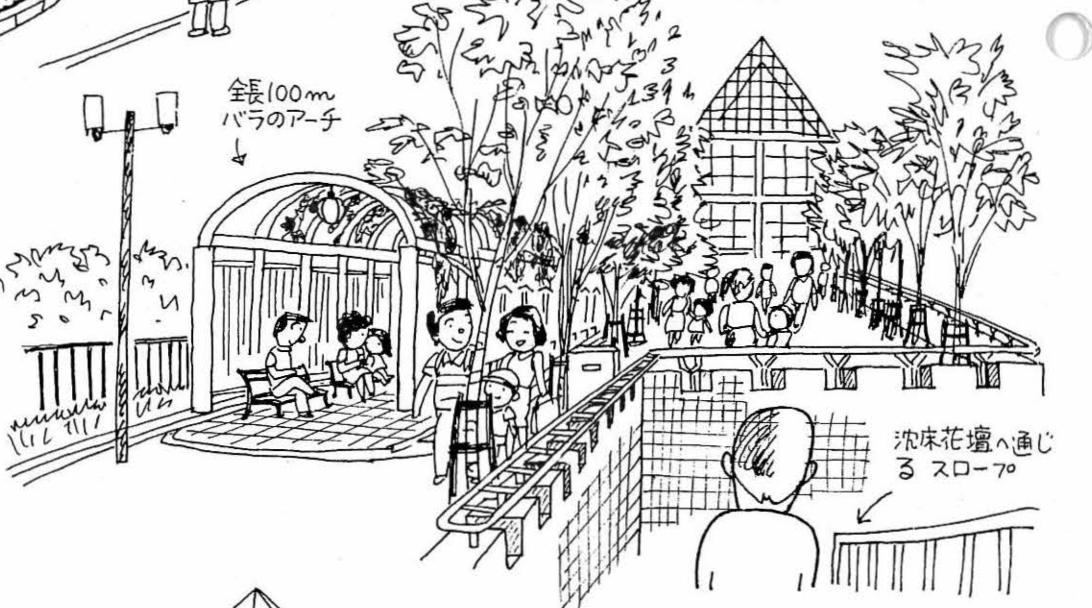
11月１日から30日まで開園50周年記念まつりが開かれ、11月１日には記念式典が行われました。

ケンちゃんの好きやねん

動物園へ行くと動物を見るのが楽しみですが、動物園へきたついでに、家族みんなで楽しめるのが天王寺公園です。動物園の入園券があれば公園(150円)は無料になります。暑い日曜日に行ってきましたので、今回は公園の風景を集めました。

公園の東側にあるのが天王寺ゲートです。みどり色の丸い屋根が駅の方からもよく見えます。ゲートの前は広場なので、待ち合せ場所にもなっているようです。

公園内に入いると、左に円型のバラのアーチがあります。品のよいベンチが間かくをあけて置いてあり、どのベンチも人が座っていました。



正面に石の彫刻みたいなフン水があります。離れて見ると、水しぶきで煙っているようです。暑さのせいで、子供がパンツひとつで水あびしています。プールじゃないけど、ほんとに気持よさそうでした。

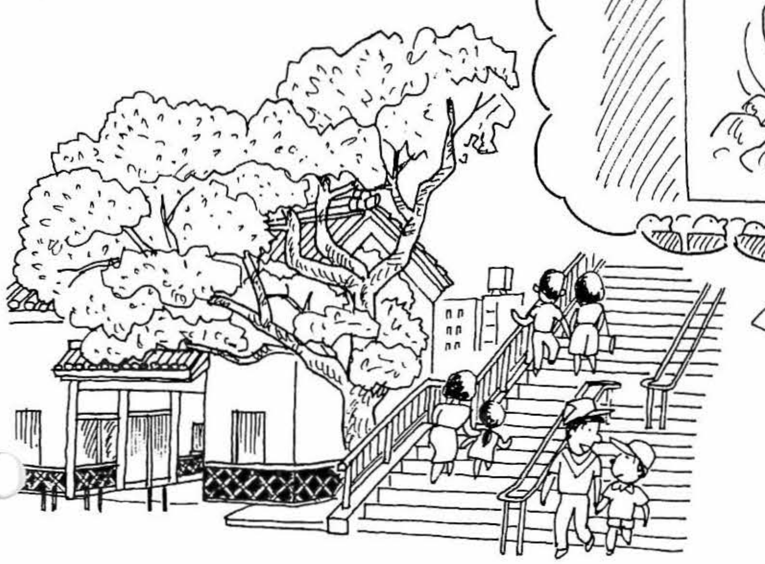
動物園

まんが 松葉 健

三角屋根の館は、植物温室。いろいろな花がいっぱいで花博にきたような気持になりました。花にカメラを寄せて写している おじさんが何人もいました。

三角屋根の植物温室にひっついて円筒形の映像館があります。

アイマックスの大画面はスゴかった。有料。(大人600円)(小人300円)



植物館(温室)の北隣りは盆栽などの展示コーナー。そこから美術館へ向う陸橋を北へ越えると旧黒田藩の長屋門。そして東に慶沢園(住友家寄贈の名庭)があります。この庭は静かで美しかったです。

美術館の前を通って茶臼山へ出ました。家康が陣をひいたところ、とか。河底池に赤い橋がよく合っているように思いました。アヒルが2、3匹のんびり泳いでいました。

動物園日記

5/30. 今季5頭目のニホンザルが生まれました。

6/1. 毎年恒例のヒツジの毛刈りを行いました。
今季6頭目のニホンザルが生まれました。
第6回天王寺動物園写真コンクールの入賞者が決定しました。

6/3. ニホンジカが2頭生まれました。
カモシカ園のインドクジャクが抱卵を開始しました。

6/4. オオサマペンギン3羽、イワトビペンギン10羽、マカロニペンギン1羽を冷房室に移しました。
福岡県にある「海の中道海浜公園動物の森」の獣医高田真理子さんが来園されました。

6/5. 65年ぶりにダチョウが1羽ふ化しました。
鳥の楽園でオシドリが3羽ふ化しました。
ワシミミズク1羽が広島市安佐動物公園から贈られて来ました。

6/6. フェレットを1頭保護しました。
6/3生まれた2頭のニホンジカのうち1頭が死亡しました。

6/7. 今季はじめてのカリフォルニアアシカの赤ちゃんが1頭生まれました。

カリフォルニアアシカの赤ちゃん

6/9. ゴイサギ、タヌキなどの保護動物を自然復帰させました。

6/10. コシアカツバメの雛2羽、カルガモの雛4羽、ムクドリの雛1羽、ヒヨドリ1羽、シマリスの子供1頭を保護しました。

6/11. 6/5ふ化したダチョウの身体測定を行いました。

6/12. 5/20保護したアカエリヒレアシシギを自然復帰させました。

6/13. マクジャクが1羽自然ふ化しました。

6/14. セイランが1羽自然ふ化しました。

6/15. 6/6保護したフェレットの飼い主が見つかりました。
秋吉台自然動物公園の獣医笹野聡実さんが来園されました。

6/17. 第62回動物のお話とスライドの会「オオカミのお話」を開催しました。
シマヘビを1頭保護しました。

6/18. タヌキ1頭、ドバト1羽を保護しました。

6/19. スズメを1羽保護しました。

6/20. ヒョウの赤ちゃんが2頭生まれました。
鳥の楽園でメジロガモが5羽ふ化しました。
ハリネズミを1頭保護しました。

6/21. ムクドリ、ヒヨドリ、ドバトを1羽ずつ保護しました。

6/22. 鳥の楽園で今季最初のカルガモが1羽ふ化しました。

6/23. 6/19保護したスズメを自然復帰させました。

6/24. キジバトを1羽保護しました。
パタスザルが怪我をしたので入院させました。

6/25. ニッポンアナグマの子1頭を保護しました。

ニッポンアナグマの子

鳥の楽園で今季生まれたシュバシコウの雛5羽に足環を装着しました。
5/21にふ化したフンボルトペンギンを人工育雛に切り換えました。

フンボルトペンギンの赤ちゃん

6/26. 2羽目のダチョウがふ化しました。

6/27. グラントシマウマのキャンディがメスの赤ちゃんを生みました。

グラントシマウマの赤ちゃん

今季3頭目のニホンジカが生まれました。
鳥の楽園でハクガンが3羽ふ化しました。

6/29. カモシカ園のインドクジャクが4羽自然ふ化しました。
今季4頭目のニホンジカが生まれました。

6/30. シマスカンクを1頭保護しました。

動物園ニュース

§ 65年ぶり、ダチョウのヒナ誕生

当園では大正14年に、国内で初めてダチョウの人工ふ化に成功しました。自動温度調節器もない時代に、後に2代目園長となった寺内信三技手が、石油ランプを熱源としたふ卵機を製作し、43日間の苦労のすえ、ふ化に成功しています。

生後3日目のダチョウのヒナ

今回、6月5日にふ化したものは4月25日に産卵したものです。卵の重さは1600gで、ふ化時の体重は1140gでした。ふ化後、6月8日からエサを給与しましたが、エサをついばみ始めたのは翌9日からで、減少していた体重は11日から増加しはじめました。6月22日現在、体重2300gとなり、生後一ヵ月頃には恐らく3kgに達していることでしょう。

このダチョウのヒナはエミュウ舎横でご覧いただけます。

§ ワシミミズクのオスの来園

ワシミミズクのオスが、広島市安佐動物公園のご厚意で6月5日に来園しました。当園では、いずれも当園生まれのメス2羽のみを飼育していましたので、待望の雄の来園となりました。今後の繁殖が楽しみです。

§ 第6回天王寺動物園写真コンクール入選作品展

春の動物園まつりの一環として「動物と花と緑と」をテーマに、第6回写真コンクールを開催し、作品の募集を行ってきましたが、6月1日に動物写真家の内山晟氏をお招きし、市長賞を始めとする入選作品31点を選考しました。これらの作品を、展示館で6月10日から30日まで展示し入園者の皆さまにご覧いただきました。

巣箱の中のヒョウの母子

§ ヒョウの赤ちゃん誕生

6月20日、ヒョウの赤ちゃんが2頭生まれました。現在の夫婦は、昭和61年3月に来園して以来、これで4回目の出産となりました。

2頭ともに寝室内の巣箱の中で順調に育っています。一般公開は8月初旬を予定しています。

§ 日本ではじめて、セイランの自然ふ化

当園は、昭和35年6月11日に日本ではじめてセイランの人工ふ化に成功しましたが、まる30年を経過した本年6月14日には自然ふ化にも成功しました。これも日本ではじめてのことです。

親鳥は今回6個産卵しこのうち4卵をふ卵機に入れ人工ふ化させたところ、2卵のみがふ化しました。そして残り2卵は親鳥が自然抱卵していましたが、うち1卵がふ化しました。

セイランの母子

§ 動物園協会総会の開催

6月28日、園内レクチャールームで大阪市天王寺動物園協会の総会が開催され、玉井義弘建設局長の理事新任と西尾照子会長以下、全員の役員が再任されました。

動物園協会総会の模様

◎ お知らせ

動物のお話とスライドの会
8月19日(日) ゾウのワンポイント
9月16日(日) 今年生まれの赤ちゃんのお話
10月21日(日) お休み
時間：午後1時〜2時
場所：レクチャールーム

◎ テレフォンサービス実施中

催し物、トピックスなど魅力たっぷりの動物園の案内を、24時間テレフォンサービスで行っていますので、ぜひご利用ください。

電話番号 771－9999

現在の飼育動物数
（平成2年6月30日現在）

哺乳類	13目	103種	487点
鳥類	20目	187種	778点
爬虫類	3目	33種	81点
合計	36目	323種	1346点

＊ 休園日のお知らせ ＊

動物園の休園日は毎週月曜日（休日の場合は翌日）です。
開園時間は午前9時30分から午後5時までで、午後4時まで入園できます。

愛ある暮し、応援します。

Kintetsu

近鉄百貨店

DEAR LIFE BOOKS

生態・飼育・図鑑が一つの本の中にギッシリ

中川道朗・岩合徳光／監修
B5変型判・オールカラー
定価580円

動物園で暮らす様々な生き物達、自然の中ではどんな暮らしをしているのか？　動物園での世話の仕方は？　仲間は？　など、写真と精密イラストをまじえ紹介します。

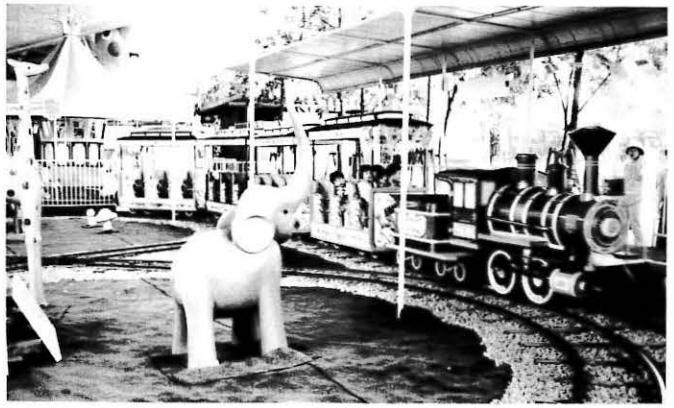
くらしとかいかたシリーズ<既刊本>
B5変型判・オールカラー・各定価580円

むし くらしとかいかた
野山でみかける身近な昆虫たち250種を紹介。

ちいさないきもの くらしとかいかた
昆虫以外の小さな生き物を320種紹介。

お求めは、お近くの書店で。　ひかりのくに株式会社　本社／〒543 大阪市天王寺区上本町3-2 ☎06-768-1151代表

たのしい〝のりもの〟が待っています。



1人1回
100円
(1才まで無料)

団体割引
(30人以上)
……1割引

久竹娯楽株式会社
TEL(06)541-3938(代)

◎園内3ヵ所(南園入口横、北園ステージ横、北園高架下)に各種〝のりもの〟があります。

オートフォーカスカメラに

フジカラー
SUPER HG 400

ピントが合いやすいフイルムです

カメラの大林
桜橋本店 ☎341―8091
三番街店 ☎372―5031

全国の愛犬家の共感を呼ぶ無比の愛犬歌集　（絶賛四版）

歌集犬の歌

平岩米吉著

著者が、約四十年の間に、共に暮らした七十余頭の犬の生と死を歌った四百十九首を収録。同時に、その誕生より老齢に至る写真四十七図を収めた、犬の一生の生態写真集でもある。

天金・美装箱入
B6判・270頁
3000円・〒不要

《感動の言葉》
☆この歌は愛犬と異体同心の境地である。（英文学者）
☆人として注ぎ得る愛情の極致を示している。（動物研究家）
☆一首ごとに、ことごとく魂にひびく歌です。（動物愛護家）

●本書は、書店ではお買い求めになれません。直接当会へお申し込みください。

〒152/東京都目黒区自由が丘3-12-2　**動物文学会**　電話(03)717-1659/振替・東京5-9800

新作
貸出用ビデオ「楽しい天王寺動物園」
19分(10本常備)

● 対　象／保育園・幼稚園・小学校の先生
● 貸出期間／10日間
● 貸 出 料／無料(但し郵送料480円は必要)
● 申 込 先／当協会まで手紙かハガキでお申込下さい。

コアラテレホンカード(限定販売)
好評発売中 ¥800(50度用)

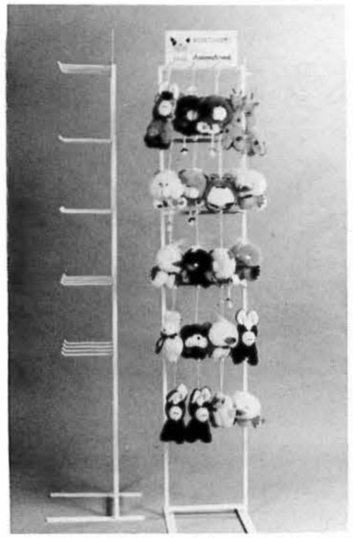
天王寺動物園の本

入園の記念・手引に……

オールカラー
500円

園内売店にあります。

大阪市天王寺動物園協会　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6-74 ☎(06)771-0201



動物ぬいぐるみは 子供のゆかいなお友達

―各種ぬいぐるみ企画・製造・卸―

有限会社 **アニメランド**

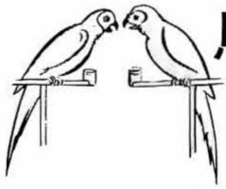
〒547 大阪市平野区西脇4丁目5番22号
TEL：(06)704―8580
FAX：(06)704―8565

動物園内でのお食事、ご休憩は

大阪市天王寺動物園内

中央売店

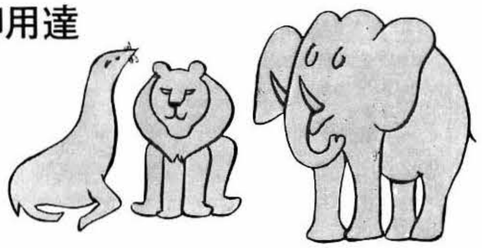
☎ (06) 771―0973



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達

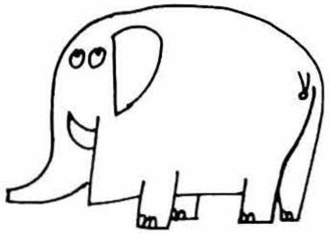
・医学実験用動物
・宣伝用、テレビ用、貸動物
・原色世界雑類図鑑（34種1枚もの）要郵便券250円



有限会社 **吉川商会**

本　社　神戸市中央区中山手通3丁目11番4号　電話(078)221-8195㈹
飼育場　兵庫県小野市来住町1513番地

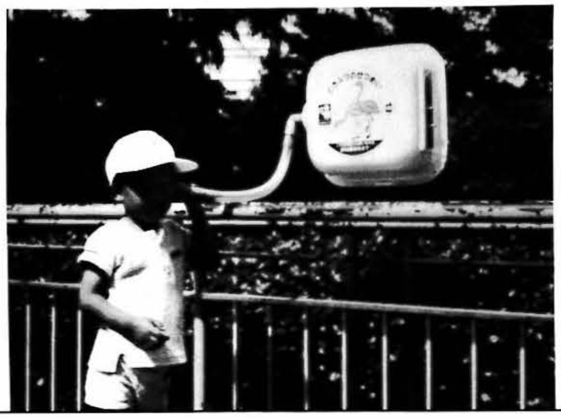
天王寺動物園内



南園売店

大阪市天王寺区茶臼山町6―74
電話 (06) 771―7110番

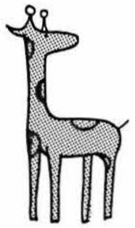
たのしい〝動物のお話〟は、ガイドマシン（動物説明機）で、どうぞ!!



関西特機株式会社
電話 06-762-2333
1回　20円

園内、主要動物舎
30数ヵ所にあります

園内でのお写真は… 動物園協会指定写真部へご用命下さい!!



◎随時係員が待機しておりますのでご説明に伺いました際は、よろしくお願い致します。

カラー写真　キャビネ1枚 **500円**

撮影無料にてキャビネ1枚をサービスさせて戴きます。
撮影予約も受付しておりますのでご連絡下さい。

国際航空写真株式会社
TEL 06―856―7444

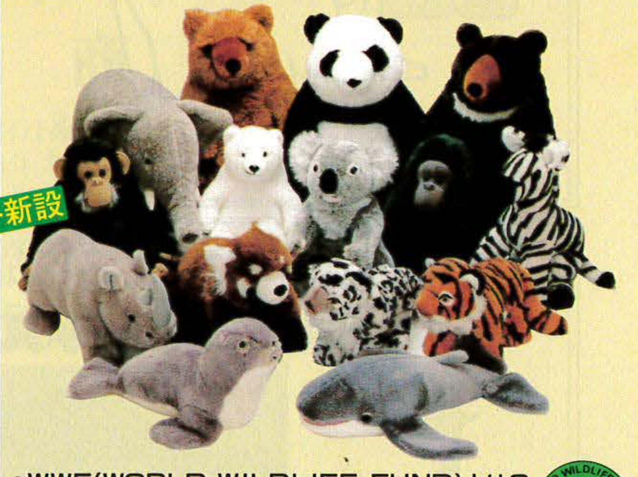
浅香 唯

野生動物をみんなで守ろう

WE SUPPORT WILDLIFE!

天王寺動物園協会の売店に〝WWF国際保護動物ぬいぐるみコーナー〞が新設されました。このぬいぐるみの売上げの一部はWWFJ(世界野生生物基金日本委員会)に寄付されます。すばらしい野生動物を私たちの手で大切に守りましょう。

ぬいぐるみ販売コーナー新設



お申込み、お問合わせは——

社団法人 大阪市天王寺動物園協会
(天王寺動物園内) TEL (06) 771-0201

株式会社 ファミリア商事部
TEL (078) 321-0345

●お電話でのお申込みは動物園協会まで。
なお、郵送の場合は実費を負担していただきます。

●WWF(WORLD WILDLIFE FUND)とは?
世界野生生物基金。世界中の危機に瀕している動物たちと、その自然環境を保護するための機関です。

なきごえ　1990年8月10日発行（毎月10日発行）第26巻　第8号　（通巻300号）

編　集／大阪市天王寺動物園　〒543 大阪市天王寺区茶臼山町6—74
発行人／大阪市天王寺動物園協会　橋本一郎　電話 大阪 (06) 771—0201
印刷所／株式会社 松村善進堂　定価150円（送料共）1年継続（12部）1,650円（送料共）　振替口座 大阪3—37823

編集委員（伊東重朗／大西史朗／藤野勝吉／中山良三郎／中川哲男／吉本昌俊／奥上　昇／大谷直樹／宮下　実／長瀬健二郎／榊原安昭／森本委利／竹田正人／大野尊信／野口秀高／早川　篤／赤松　建／中垣圭史／大川光雄／土谷正道）